伊 勢 国 府 跡 15

２０１３年３月

鈴鹿市考古博物館

例　言

1　本書は，国庫・県費補助事業として鈴鹿市が 2012（平成 24) 年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）第 30 次調査の概要をまとめたものである。

2　発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体　鈴鹿市　（市長　末松則子）

調査指導　八賀　晋（三重大学　名誉教授）
伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員）
川越俊一（独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　名誉研究員）
金田章裕（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　機構長）
和田勝彦（財団法人　文化財虫害研究所　常務理事）
渡辺　寛（皇學館大学　名誉教授）
文化庁文化財部記念物課
三重県教育委員会社会教育・文化財保護課

調査担当　鈴鹿市　文化振興部　考古博物館

組織及び構成

鈴鹿市考古博物館長	東口　元
主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	新田　剛
埋蔵文化財グループ副主幹	服部真佳
副主査	田部剛士・吉田隆史
事務職員	米川梨香
嘱託	吉田真由美・小川陽子

3　発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。
〔第 30 次〕鈴鹿市広瀬町字丸内 2612 番 1　81㎡　平成 24 年 12 月 1 日～平成 25 年 2 月 28 日

4　現地調査及び本書の編集・執筆は新田が担当した。

5　調査参加者は以下のとおりである。
〔現地調査〕小河清角・勝野春男・野口省三・中川征次・吉岡健次・前川義輝
〔屋内整理〕永戸久美子・加藤利恵・横内江里

6　Fig.1 では国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」の一部を，Fig.2 では国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を使用した。

7　座標は過去の調査との整合性を保つため，日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお，図中の方位は座標北を示す。

8　検出した遺構には，遺構番号の前に性格を示す記号を付与している。その性格は以下のとおりである。
SD：溝

9　本調査に係る遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

10　調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の他に，地権者並びに地元各位をはじめ，下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）
禰宜田佳男・野原宏司・伊藤文彦・石井智大・河北秀実・嶋村明彦・亀山　隆・山口昌直・藤岡直子・伊藤秀治・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館・亀山市教育委員会・広瀬町自治会・広瀬町能褒野自治会・西冨田町自治会・中冨田町の山自治会・中冨田町の町自治会

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの調査成果 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 5
Ⅲ　基本層序 …… 5
Ⅳ　調査の経過 …… 5
Ⅴ　遺構と遺物 …… 5
Ⅵ　まとめ …… 5

表　目　次

Tab.1 調査履歴 …… 4
Tab.2 報告書抄録 …… 14

挿　図　目　次

Fig.1　位置と周辺の遺跡　1：20 万 …… 1
Fig.2　位置と周辺の遺跡　1：5 万 …… 2
Fig.3　調査区位置図　1：5,000 …… 3
Fig.4　調査区平面図　1：250 …… 6
Fig.5　方格地割北西部平面図　1：1,000 …… 7
Fig.6　国庁及び関連施設の模式図　1：2,500 …… 9
Fig.7　国庁及び関連施設の変遷 …… 12

写真図版目次

Plate 1　1 調査前全景 北東から／2 トレンチ 1 南から／3 トレンチ 1 北から／4 トレンチ 1 北から／5 トレンチ 2 北から／6 トレンチ 3 西から／7 トレンチ 4 東から …… 13

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの調査成果

長者屋敷遺跡は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に位置する。遺跡をのせる標高約 49m の台地は水沢扇状地の中期面に相当し[註1]，台地南面に広がる低地との比高差は約 20m である。地表面に認められる「黒ボク土」は耕作等人為的に攪乱を被っている場合が大半で，プライマリーな堆積状況を留めることは稀である。

遺跡の大半は鈴鹿市広瀬町に含まれ，一部は鈴鹿市の西に隣接する亀山市能褒野町に及ぶ。鈴鹿市域における当遺跡一帯は農業振興地域であり，水田や茶・サツキ・芝などの畑が広がる。

遺跡の範囲は南北約 1300 m・東西約 700m で，瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約 800m・東西 600m に限られる[註2]。その瓦散布範囲の南端中央に位置する国庁部分と国庁の北で発見された建物群を合わせた 73,940㎡が平成 14 年 3 月 19 日に伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。国府関連遺構および遺物の時期は 8 世紀中頃前後から 9 世紀初頭までに収まる。

当遺跡を含む鈴鹿川流域には古来東西交通の要衝として多くの遺跡が残され，古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。伊勢国内における古代東海道の痕跡は十分明らかにされていないが，延喜式に知られる鈴鹿・河曲・朝明・榎撫の各駅家を経由して尾張国に至る経路のうち，鈴鹿・河曲の両駅が鈴鹿川流域に位置することは疑いない。史跡伊勢国府跡の西約 10km には鈴鹿関跡が，東北東約 7km には史跡伊勢国分寺跡があり，三者を結ぶ直線的な経路は駅路想定の基準の一つと考えられる。

もう一つの国府推定地である鈴鹿市国府町は史跡伊勢国府跡から南南東へ約 3.5km に位置し，国府町と史跡伊勢国分寺跡を直線的に結んだ中間地点に所在する平田遺跡では側溝芯芯間が 9m の道路遺構が両者を直線的に結ぶ角度で検出されている[註3]。

長者屋敷遺跡において初めて調査が行われたのは昭和 32 年のことである。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を進めていた藤岡謙二郎らが鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の当遺跡の存在を知り，調査に及んだものである。国府町に古代伊勢国府の方八町域を想定していた藤岡は当遺跡が初期国府である可能性を示唆しながらも，鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した[註4]。

鈴鹿市では平成 4 年から学術調査を開始し[註5]，平成 5 年には国庁跡の調査によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した[註6]。国庁の北方においては南野南地区や長塚南西地区において建物群が発見される一方，三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査で方格地割の存在が

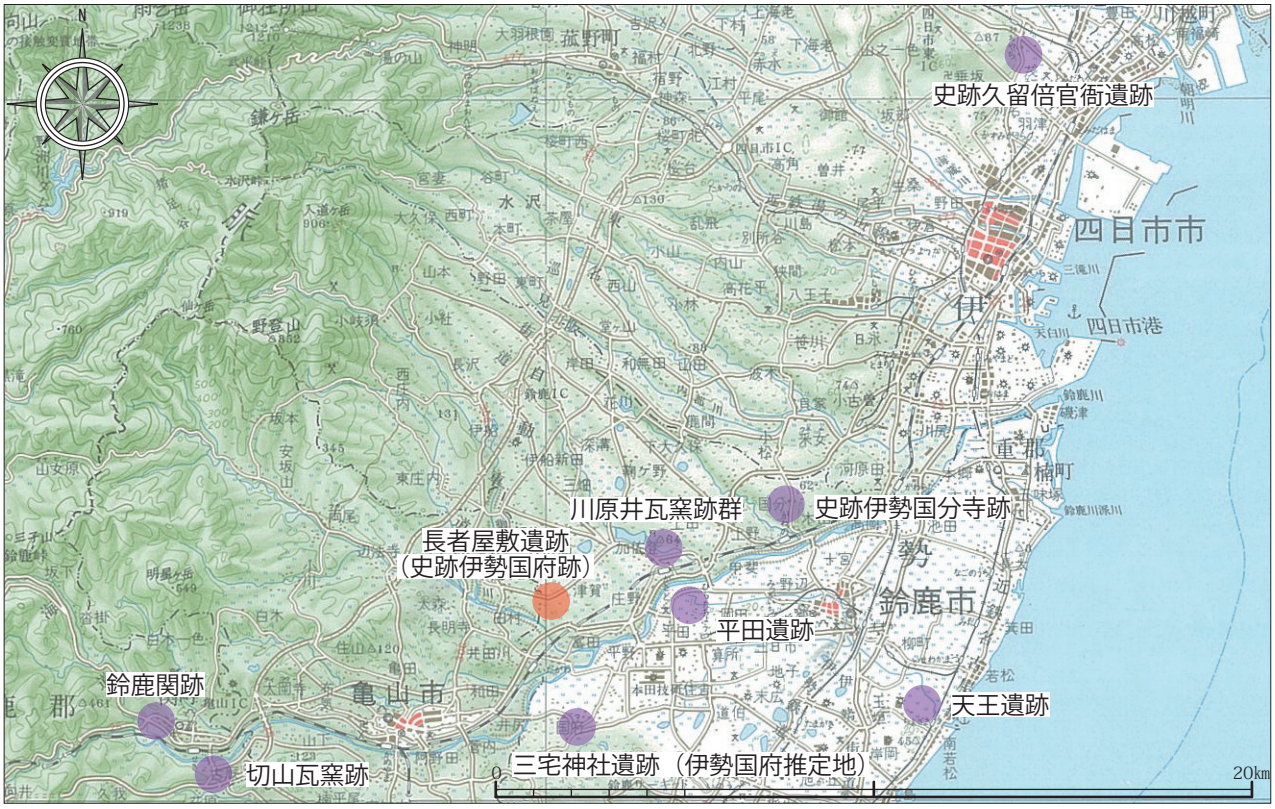

Fig.1　位置と周辺の遺跡　1：20 万

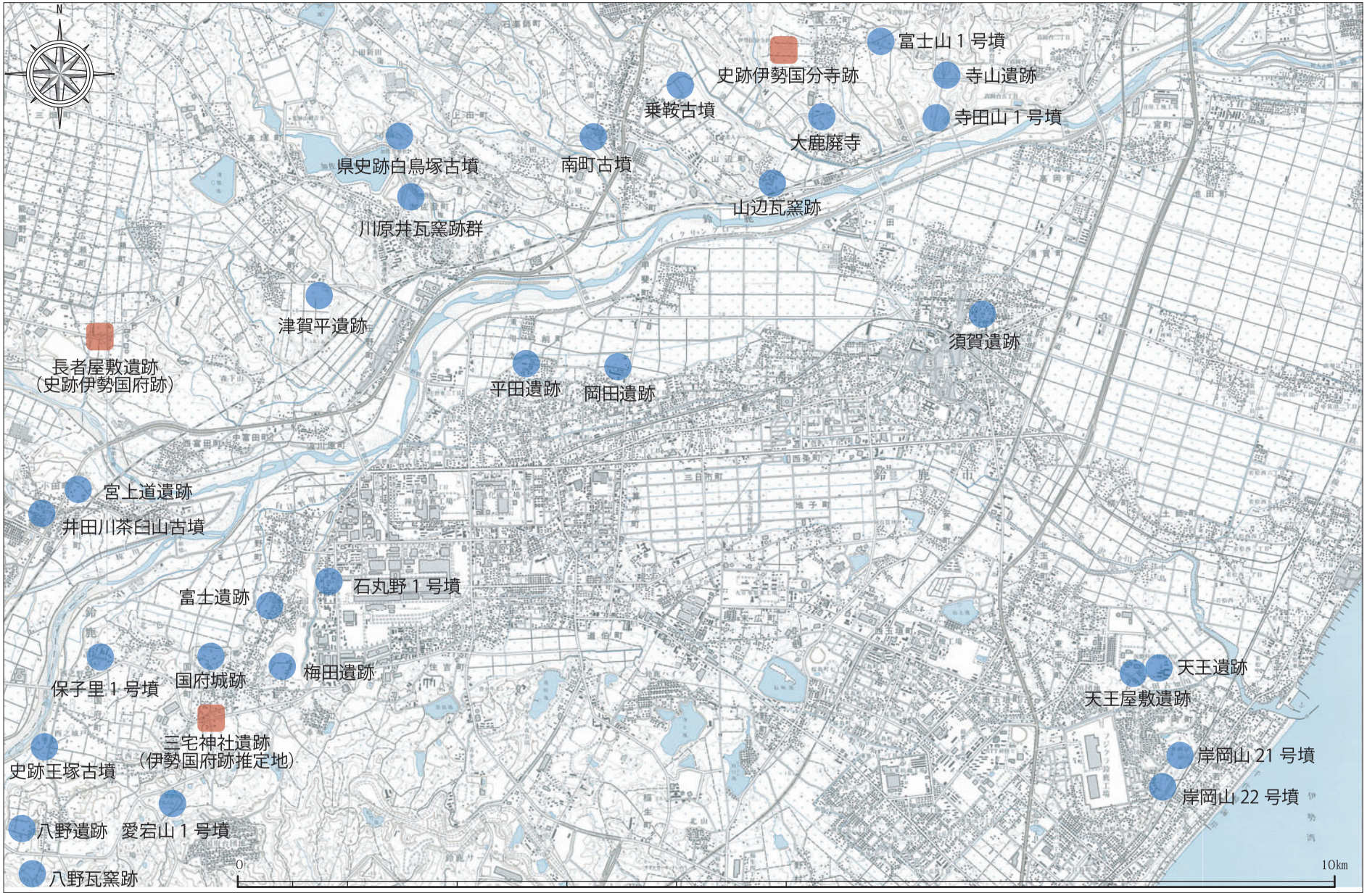

Fig.2　位置と周辺の遺跡　1：5 万

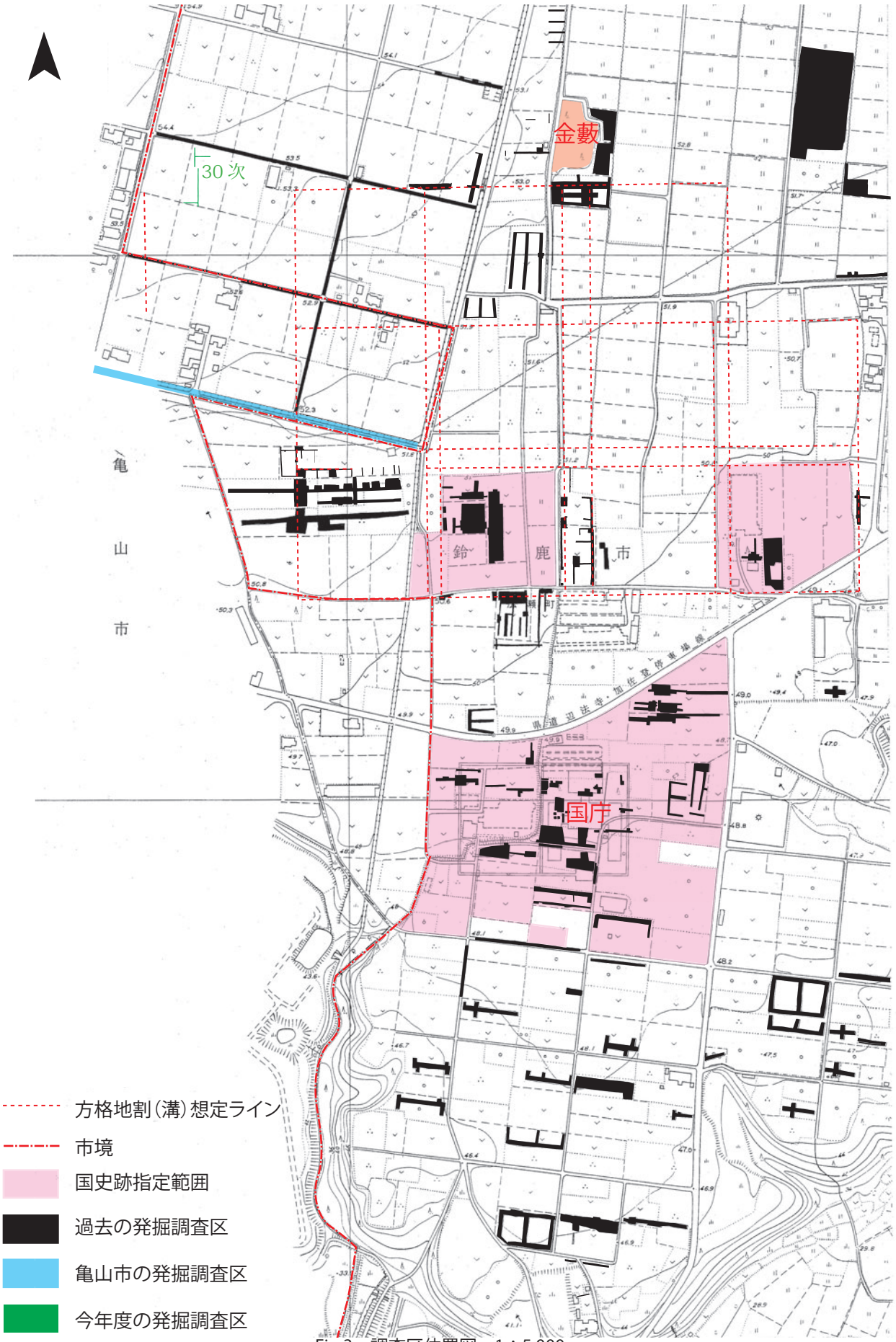

Fig.3　調査区位置図　1：5,000

Tab.1　調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積（㎡）	調査原因	概要
プレ 1 次	1957	A 地点	広瀬町字南野			学術	礎石建物
		B 地点	広瀬町字矢下				基壇
1 次	1992	長塚 1	広瀬町字長塚 1247,1248	921110 ～ 930129	110	学術	礫敷き遺構
		南野 1	広瀬町字南野 971		115		礎石建物
		荒子 1	広瀬町字荒子 981		110		瓦溜・溝
2 次	1993	6AHI-F、6AJA-A ほか	広瀬町字仲起 1226・矢下 1134 ほか	931129 ～ 940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝
3 次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字矢下 1131 ～ 1133	941006 ～ 941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝・西外溝
3-2 次	1994	県調査区	広瀬町字中土居 , 亀山市能褒野町字中土居	940601 ～ 940817	2,700	県緊急	溝
4 次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	950920 ～ 951219	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西隅楼
4-2 次	1995	県調査区	広瀬町字中土居 , 亀山市能褒野町字中土居	950605 ～ 950713	1,600	県緊急	溝
5 次	1996		広瀬町字丸内	960620 ～ 960716	133	市緊急	竪穴住居・溝
6 次	1996		広瀬町字矢下	960625 ～ 960719	288	市緊急	溝
7 次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972,972-1,972-2,973	961007 ～ 970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8 次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279-2	971016 ～ 980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝
9 次	1997	A 地区	広瀬町字矢下	980223 ～ 980320	21	市緊急	政庁南辺部
		B 地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿
		C 地区	広瀬町字仲起		5		溝
10 次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279-3,1279-5	980901 ～ 981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11 次	1999	6AJA-H ほか	広瀬町字矢下 1176 ほか	990901 ～ 000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12 次	2000	6AHI-CF ほか	広瀬町字中起・荒子	001001 ～ 010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝
13 次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字中起 1237,1240-1 ～ 3,1241	010920 ～ 020214	714.2	学術	溝・土坑
14 次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中土居 1282-1	020106 ～ 020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15 次	2002	6AJJ-D ほか	広瀬町字矢下 1 154 ほか	020424 ～ 020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓
16 次	2002	6AJF-B ほか	広瀬町字矢下 , 西冨田町字東起・矢卸	020620 ～ 020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓・古墳周溝・方形周溝墓
17 次	2002	6ADB － A ～ E	広瀬町字西野 3300	020806 ～ 021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居
18-1 次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下 1126	030417 ～ 030630	243	学術	溝
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144	030421 ～ 030630	267		溝
		6ALE-A	西冨田町字矢卸 1015 － 17	030528 ～ 030630	21		なし
		6ALE-B	西冨田町字矢卸 1015 － 17	030528 ～ 030630	11		なし
		6ALC-G	西冨田町字矢卸 1015 － 15・16	030528 ～ 030630	48		なし
18-2 次	2003	6AEA-A	広瀬町字中土居 1283-2	030902 ～	360		溝・土坑
19 次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609-1	040831 ～ 041118	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290-1	040913 ～ 041118	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275	040928 ～ 041118	550		竪穴住居
20 次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内 2606-1,2607-1,2608-1	050822 ～ 051130	200	学術	溝
		6AGF-A	広瀬町南野 945-6	051011 ～ 051130	140		溝
21 次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719 ～ 060908	500	学術	溝・土坑
22 次	2007	6A D C -A	広瀬町字西野 3311	071001 ～ 071206	326	学術	風倒木・ピット
23 次	2007	—	亀山市			亀山市緊急	溝
24 次	2008	6AEB-C	広瀬町字中土居 1282-2	080616 ～ 080717	835	市緊急	溝・撹乱坑多数
25 次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野 3243 番 ,3248 番	081001 ～ 081226	690	学術	溝・礫敷き遺構
26 次	2008	6A D C -B	広瀬町字西野 3313 の一部	081218 ～ 081226	55	学術	溝・土坑・風倒木
27 次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚 1244 番	090817 ～ 091216	580	学術	溝（道路跡）・ピット・風倒木
28 次	2010	6ABA-B	広瀬町中土居 1305 番 1	101101 ～ 110131	59	学術	なし（風倒木のみ）
29 次	2011	6ABA-C	広瀬町中土居 1299 番 1	111201 ～ 120229	116	学術	溝
30 次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内 2612 番 1	121201 ～ 130228	81	学術	なし
				これまので調査面積	26,331.7		

明らかとなった[註7]。同センターで調査を担当した宇河雅之氏は，国庁域を含む南北6区画・東西5区画の方格地割を想定し，北端に位置する金藪を平城宮に対する松林苑に相当するものと考えた[註8]。その後，宇河案の検証や国庁南面における「朱雀路」の探求が行われ，方格地割については南北3区画・東西4～5区画の範囲において該当する遺構が確認される一方，「朱雀路」の存在ははっきりとしなかった[註9]。方格地割が国庁を取り込まないことがわかり，国庁と方格地割の関連が不明確であったが，方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅24mの南北大路[註10]が金藪や国庁の中軸線と一致することから，3者の関連性が一層明らかになった。

金藪は長者伝説の舞台として知られ，『高津瀬村誌』には「金籔」の項に「古長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ若シ廣瀬村（ヒヘイ）ニ陷ルノトキハ之ヲ堀レト」と記される[註11]。こうした口碑の存在からか，金藪の発掘は古来忌避されており，昭和の初めに陸軍北伊勢飛行場が建設された際も金藪を避けて陸軍用地が定められた[註12]。

Ⅱ　調査に至る経緯

近年においては方格地割の敷設範囲を追求するべく，特に北辺を中心に調査が進められてきた。平成22年度の第28次調査では金籔北方の南北中軸線上において調査が実施されたが，遺構や遺物の分布は全く確認できなかった[註13]。

金藪付近では平成20年度の第25次調査においてその東隣が調査され，幅約4.5mの東西溝SD310が検出された[註14]。溝SD310は第17次調査において検出された溝SD215[註15]の西延長線上に位置するもので，不連続ではあるが同じ性格を有する溝であると予想される。さらに，平成23年度の第29次調査では金藪の西隣において調査区を設け，SD215やSD310の延長線上からSD328が検出された[註16]。金藪及び「北限大溝」と仮称されるSD215・310・328が主たる国府関連遺構の北限であることは間違いないと思われる。

以上のような近年の調査を踏まえ，今年度は南北3列の方格地割のうち，北1列の西限に想定される丸内南西地区の北辺を確認することとした。

Ⅲ　基本層序

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　耕作土。主にⅡ層を起源とする攪乱層。

Ⅱ層　黒ボク土。

Ⅲ層　Ⅱ層とⅣ層との漸移層。

Ⅳ層　黄褐色砂質シルト層。いわゆる地山と呼ばれる基盤層。

今回の調査地は畑地で，柵板により200mmほど周囲より高くなっている。Ⅰ層は，その際の客土と従前のⅠ～Ⅲ層が混雑したもので，Ⅱ～Ⅲ層は失われており，Ⅰ層を600mm除去したⅣ層上面において遺構確認を行った。

Ⅳ　調査の経過

現地調査には平成24年12月1日に着手し，平成25年2月28日に完了した。調査の経過は以下の調査日誌抄のとおりである。

[調査日誌抄]

12月3日　調査区設定。

12月10日　トレンチ1掘削。

12月19日　トレンチ2・3掘削。

12月20日　トレンチ4掘削。

1月15日　平面図作成。

2月21日　調査指導。

2月22日　埋め戻し。

Ⅴ　調査結果

調査対象地に幅1mのトレンチを設け，Ⅳ層上面において遺構検出を試みた。方格地割北1列に関わる東西溝の検出を目的としてトレンチ1を設定し，金藪東西における東西方向の溝SD215・312・315の延長線上にトレンチ2を設けた。遺構確認面は重機の爪跡が残るものの良好に遺存していたが，遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

Ⅵ　まとめ

方格地割北1列西端の丸内南西地区に想定されていた区画は，平成7年に検出された南北方向の溝SD13によって想定されたものである。SD13は幅0.8m・深さ0.35mで，約2mに亙って検出された[註17]。埋土からの遺物出土は知られていない。東隣の丸内南東地区北辺には溝SD2・11が，同じく西辺にはSD12が，同じく東辺にはSD1があり[註18]，区画の存在は確実視される。

今回検出を試みた遺構はSD13と90度方向を違え，SD2・11の西延長線上に位置するものである。結果は前項のとおりであり，少なくとも丸内南西地区の北辺を画する溝は不存在であると考えられる。方格地割を形成することが確実なSD1・2・11・12の横断面形が

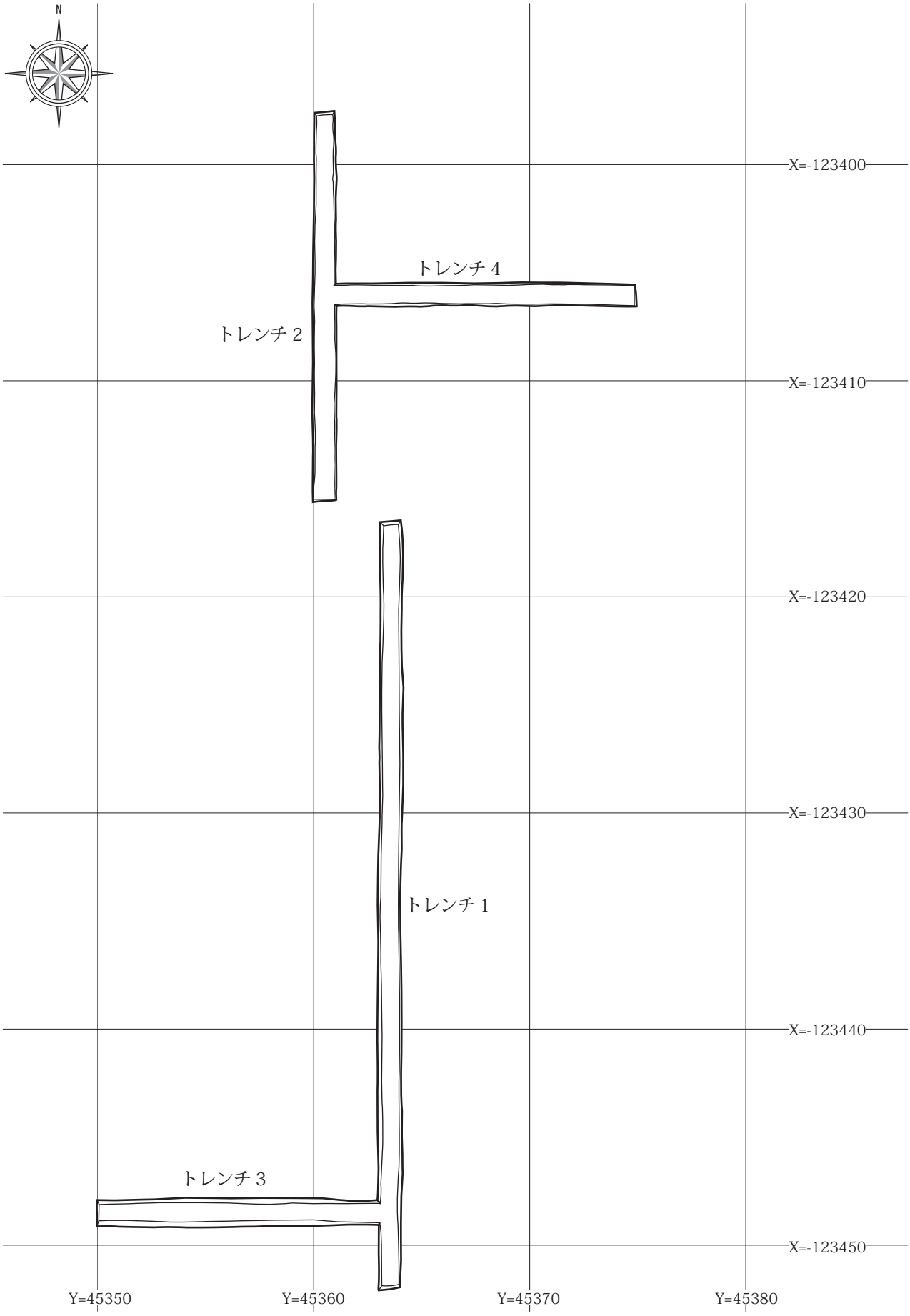

Fig.4　調査区平面図　1：250

Fig.5　方格地割北西部平面図　1：1,000

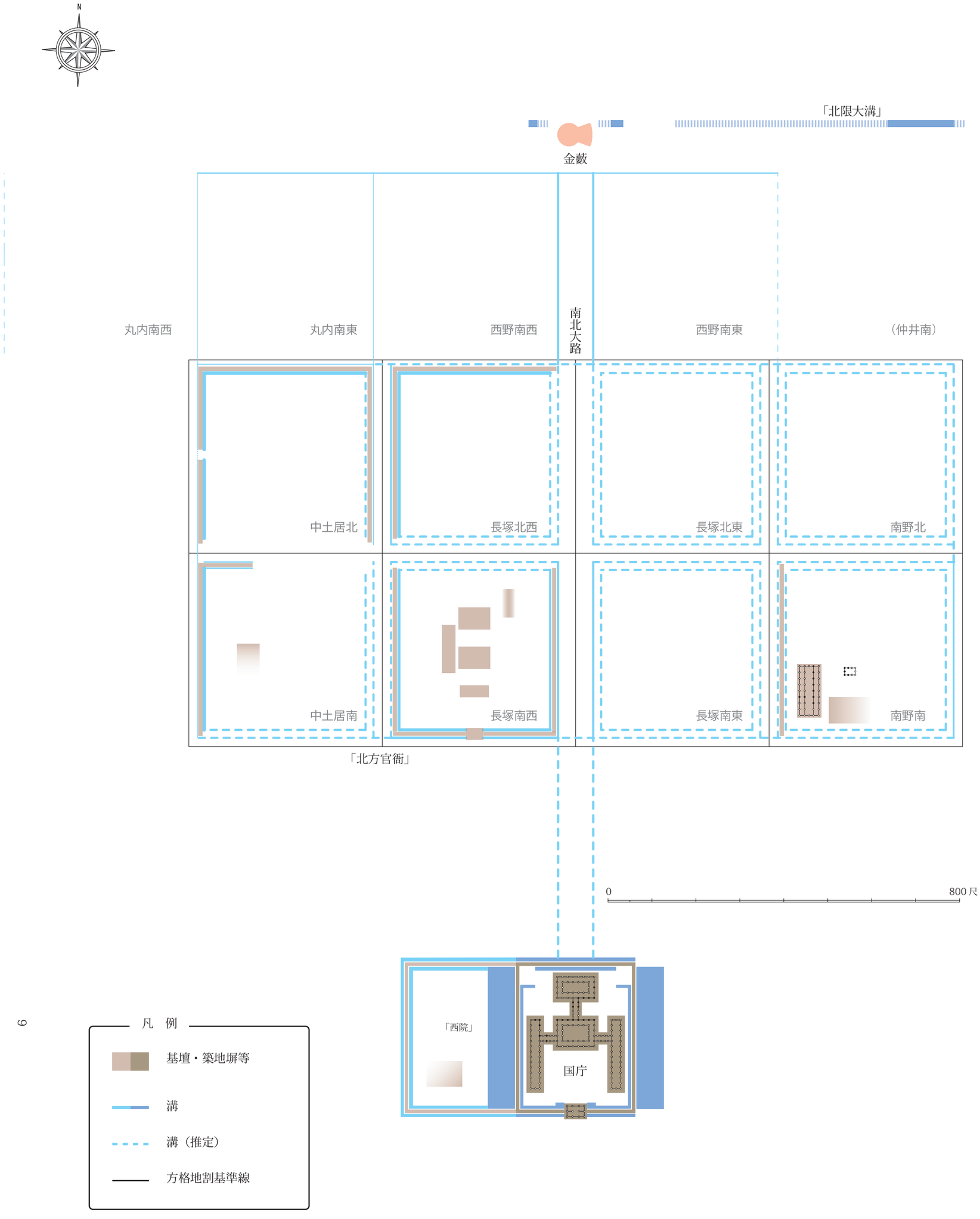

Fig.6　国庁及び関連施設の模式図　1：2,500

逆台形を示し，深さが 0.52 ～ 0.65m であるのに対し，SD13 は不整形な横断面形を有し，深さは 0.35m であることから，他の溝と性格が異なる可能性がある。SD13 はわずか 2m ほどの間で確認されたものであり，他の場所において同溝の連続を確認し，その特徴を把握する必要が生じた。丸内南西地区における区画の存在に関しては現在のところ次の三案が考えられる。

①北辺溝の施工を欠く区画である。

②本来施工されていた北辺溝が後世失われた区画である。

③西辺溝とされる SD13 は方格地割と関係のない遺構である。

①②は区画の存在を肯定する案であるが，SD13 の特徴が他の溝とは異なることから，時期や性格に違いがある可能性がある。②は今回の調査で　遺構確認面が良好に残っていたことを考えると可能性としては低いものと考えられる。③については陸軍北伊勢飛行場建設以前の中・近世を中心とする土地利用との関連を検討しなければならない。

国庁及び方格地割にかかる規格や施工順序については平成 23 年度の報告書で整理し，施工時期についての概略を示したところである[註19]。それらを模式的に示せば Fig.6 のとおりとなり，現段階においては Fig.7 のような変遷案を示すことができる。Ⅰ期は 8 世紀第Ⅱ四半期に遡りうる年代観が与えられており，金藪と中軸を揃える国庁の建設が始まる。Ⅱ期は 8 世紀第Ⅲ四半期と思われ，南北 2 区画・東西 4 区画の範囲に方格地割を伴う官衙が建設されるとともに，国庁の西に新たな院が増設される。Ⅲ期は 8 世紀第Ⅳ四半期以降と思われ，南 2 列の方格地割を基準として北 1 列の方格地割が形成される。

[註]

註 1　吉田 1984。

註 2　村山 1992。南は国庁のある字矢下から北は金藪付近まで。なお，水野 1907 では「金籔」の表記が用いられている。

註 3　林 2006。大型四面廂掘立柱建物に切られる。8 世紀代に機能していた駅路である可能性がある。

註 4　藤岡・西村 1957・13 頁。のちに国庁が確認された矢下地区については「羅城的性格を備えたもの」とし，金藪を「代表的建物」と考えた。

註 5　浅尾 1993。

註 6　新田 1994。

註 7　宇河 1996。

註 8　宇河 1997・57 頁。

註 9　吉田 2003。

註 10　田部 2010。

註 11　水野 1907・138 頁。

註 12　小河清角氏談。

註 13　田部 2011。

註 14　田部 2009。

註 15　吉田 2004。

註 16　新田 2012。

註 17　宇河 1996・16 頁。

註 18　宇河 1996・36 頁。

註 19　新田 2011 や新田 2012・7 頁。

[参考文献]

浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5 次）長者屋敷遺跡（1 次）』鈴鹿市教育委員会

稲田孝司 1973「古代都宮における地割の性格」『考古学研究』第 19 巻第 4 号

宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中冨田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター

宇河雅之 1997「伊勢国府の方格地割」『研究紀要』第 6 号，三重県埋蔵文化財センター

大川勝宏 1997「光仁・桓武朝の斎宮－方格地割形成にみる斎宮の変革－」『古代文化』第 49 巻第 11 号，古代学協会

田部剛士 2007『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2009『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2010『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2011『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館

辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国につて～」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ，鈴鹿市教育委員会

新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会

新田剛 2001『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会

新田剛 2011「伊勢国府の成立」『古代文化』第 63 巻第 3 号（財団法人古代学協会）

新田剛 2012『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館

林和範 2006「平田遺跡（5 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 7 号

藤岡謙二郎・西村睦男 1957「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群－軍團阯の問題と附近の開發をめぐって－」『史迹と美術』第 279 号

水野福松 1907『高津瀬村誌』

水橋公恵 2005『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館

村山邦彦 1992「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』128 号

山崎信二 1994『平城宮・京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的研究』（1993 年度文部省科学研究費一般研究 C 研究成果報告書）

吉田史郎 1984『四日市地域の地質』地質研究所

吉田真由美 2003『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会

吉田真由美 2004「伊勢国府（17 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号

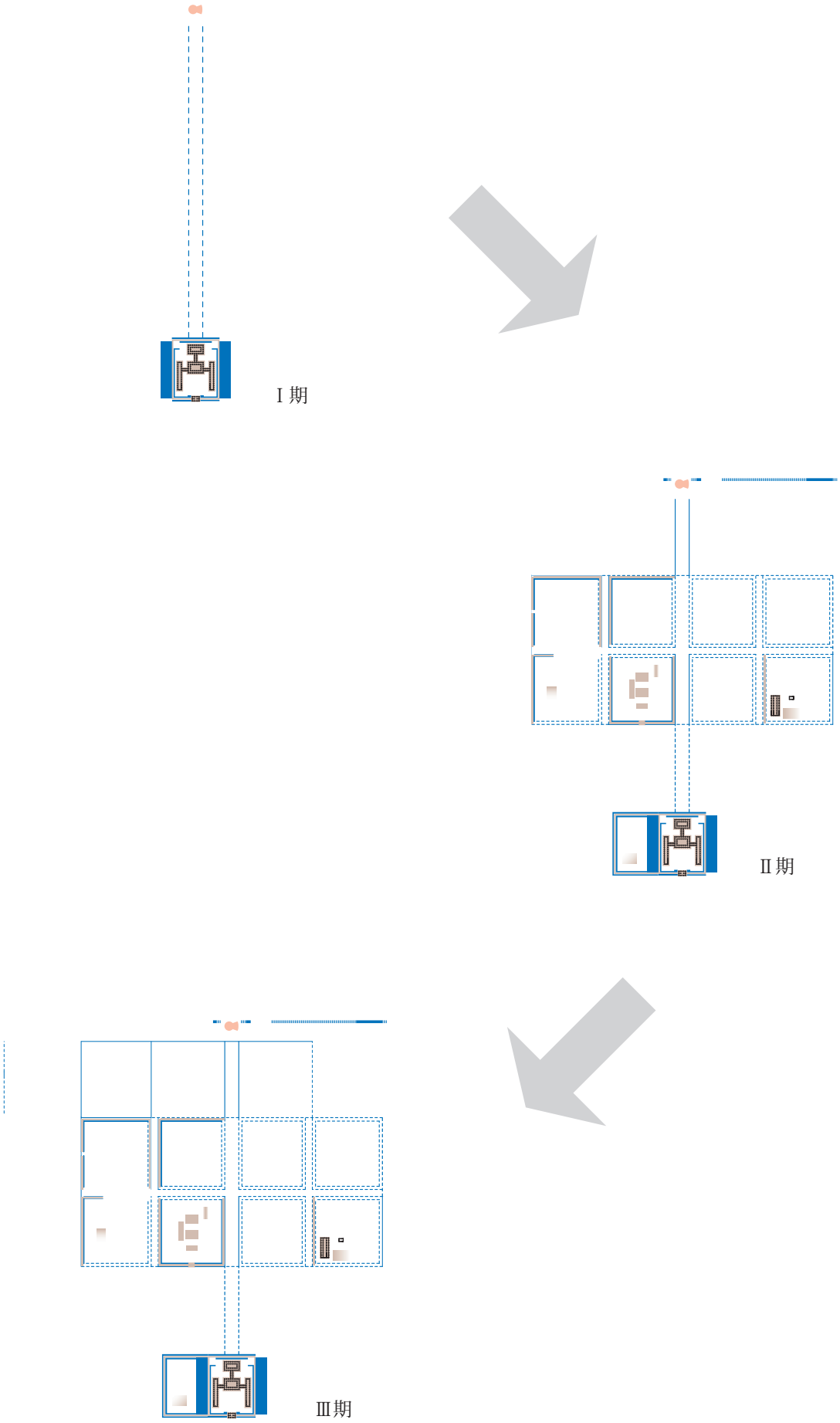

Fig.7　国庁及び関連施設の変遷

1 調査前全景　北東から

2 トレンチ 1　南から

3 トレンチ 1　北から

4 トレンチ 1　北から

5 トレンチ 2　北から

6 トレンチ 3　西から

7 トレンチ 4　東から

Tab.2

報　告　書　抄　録

ふりがな	いせこくふあと じゅうご							
書　　名	伊勢国府跡　15							
副 書 名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田　剛							
編集機関	鈴鹿市 文化振興部　考古博物館							
所 在 地	〒513-0013　　三重県鈴鹿市国分町２２４番地　　TEL ０５９（３７４）１９９４							
発行年月日	２０１３年 3月 ３１日							
所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷遺跡	鈴鹿市広瀬町 字丸内 2612 番 1	24207	363	34° 53′ 22″	136° 29′ 36″	2012 年 12 月 1 日 ～ 2013 年 2 月 28 日	81㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
長者屋敷遺跡 第 30 次 (6AAE － A)	官衙	奈良・平安	なし	なし				
要　　約	平成 4 年度から継続して行っている長者屋敷遺跡（史跡伊勢国府跡隣接地）の発掘調査である。遺跡北半において確認されている方格地割は東西 4 ～ 5 区画・南北 3 区画に亙って存在するものと想定され，うち北 1 列と南 2 列とでは敷設方法に違いがあると考えられている。北 1 列のうち一番西に想定される丸内南西地区は，平成 6・7 年度の調査で幅 0.8 mの南北溝が検出されたことにより想定される区画である。今回の調査ではこの区画の北辺に想定される溝の検出を試みたところ，全く検出されなかった。							

伊　勢　国　府　跡　15

発行日　　２０１３年3月３１日
編集・発行　鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒５１３－００１３
三重県鈴鹿市国分町２２４番地
TEL　０５９（３７４）１９９４
FAX　０５９（３７４）０９８６
E-mail：kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印刷　　株式会社　三ツ星鈴鹿営業所

Ise Kokuhu Site

Preliminary Report No.15

March, 2013

Suzuka Municipal Museum of Archaeology